

Title	研究・技術計画学会"ディシプリン"を問う
Author(s)	三隅, 二不二
Citation	年次学術大会講演要旨集, 10: 296-299
Issue Date	1995-10-05
Type	Presentation
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5472
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	シンポジウム

研究・技術計画学会“ディシプリン”を問う

三隅二不二（筑紫女学園大学）

1. 課題

研究・技術計画学会が設立され10年にあたる。その”ディシプリン”を問うというのが、本シンポジウムのテーマであるが、そもそも課題がグローバルなものであり、技術計画も科学というカテゴリーに含まれるとすれば、研究・技術学会とは科学学会と約言される。科学学会とは広大なることこれまたグローバルなものになる。学会といえは何らかのリーサーチをする集団組織の集会であるならば、科学学会は科学をリーサーチする学会、換言すれば Science of Science の学会となる。それは科学哲学の会と約言もできるが哲学をどのように考えるのかが問われよう。

ここでは形式論はやめにして私の専門分野である行動科学の視座から、基礎研究のみならず応用研究、実践研究を含めてリーサーチとは何かを論じてみたい。

2. リサーチとは

研究とは、リーサーチとは何か、自明のことといわれるかもしれないが、現代科学を基盤とした知識論ないしは認識論が関連すると思われる。もはや I.Kant 流の純粹理性批判ではなく、現代科学の世界のリーサーチの特性記述が要請されるが、その点にふれる前に、現代科学とは何かについて一言述べておこう。

3. 二つの科学、その測定ないし客観性

前述したカントの純粹理性批判の中で論じた科学は、ニュートン物理学であり、ユークリッド幾何学であった。いうまでもなく現代物理学や数学やその他の諸科学は、カント時代のそれとは、その科学性、すなわち測定性・客観性において質的に相違することは明らかである。したがって科学的知識論もニュートン式科学と現代科学では相違する。N.Whiteh

ead は、前者を機械論科学と称し、現代科学をオーガニック科学（全機科学）と称し、G. H. Mead は、前者をルネッサンス科学と称し、現代科学をリサーチ科学と称している。

前者のルネッサンス科学には、永遠の真理が存在しても後者の科学には存在しない。現代科学は、暫定的な仮説を追求するのである。その仮説はまた統計的・蓋然的なものである。

4. 基礎科学と応用科学

上述した二つの科学性の相違は、基礎科学ないし純粋科学と、応用科学との関係においても生じてくる。自明のことながら、基礎科学と応用化学について述べるならば、行動科学の代表科学である心理学では、一般心理学（基礎科学）で明らかにされた原理を実際に応用しただけの応用心理学は、もはや存在しない。いうまでもなく応用の中に基礎があり、基礎は応用なしに発展しない。現代の行動科学が挑戦する課題は、複合的なものである。したがって学際研究がむしろ常道であり、基礎研究と実践研究が相互参入しているのである。

5. 現代行動科学のリサーチパラダイム

方法論上、自然科学と共生関係にあると見なされる行動科学のリサーチパラダイムとして筆者は第1図に見られるように現代行動科学のリサーチを四つのリサーチ行動に分けて考察している。そして、筆者自ら、マネジメント行動としてのリーダーシップ行動の研究をこのパラダイムに相即して体系的記述と説明を試みてきた。

矢田部達郎は、学問研究ないし科学的研究の発生機序に関して次のように述べている。「あらゆる学問は、その研究対象の現象的分類から出発し、その各領域を支配する法則の探求を行い、その探求の結果を掲げて再度分類を修正していく、かくして分類と法則の探求とは、循環的相互規定の関係によって学問の体系が発展していくのである。」さらに続けて、「要は、分類と法則の探求によって、矛盾のない組織的知識を獲得しようとするのが、あらゆる学問の本質なのである。」この学問の二つの側面、すなわち分類と法則探求とのいずれに重きをおくかにしたがってリサーチのあり方を二つの部分に分けることが

	一般的	特殊的
行動形態学	一般行動形態学	特殊行動形態学
行動力学	一般行動力学	特殊行動力学

図1. 行動科学のパラダイム

可能となる。行動科学は、社会科学の全般に渡るが、そのユニットは、個体の行動、あるいは個体の集合体行動である。これらの行動の記述と分類を行うリサーチタイプをリサーチ行動形態学と称するのである。しかし、このような現象記述と分類のみではリサーチとしては不十分である。すなわち現象の条件発生的機序、すなわち法則的知識を探索するリサーチを行動力学のリサーチと称する。

さていかなるリサーチもスペシフィックな条件下にスタートする。したがってこのスペシフィックな条件下のリサーチすなわち特殊行動形態学の研究が始まるが、知識としての適用妥当性が、特殊的となり狭い。そこでその般化のための抽象化を進めて一般的行動形態学を求めるのである。リサーチ行動力学においても同様に、一般と特殊のアプローチが区別されよう。かくして第1図のごときパラダイムが構成されるのである。

6. 現代の社会科学に欠けるもの

現代の社会科学の研究に欠けるものは、一般行動形態学と一般行動力学のカテゴリーであろう。自然科学における生物学のようなカテゴリーが存在しない。政治・経済・経営・宗教、これらの文化的行動一般に妥当する一般的人間行動形態学と力学のカテゴリーが存在しない。したがってそのディシプリンも不明確である。たとえば経営学の内部には、一般行動形態学的記述はなされるが、それが特殊行動形態学との関係がシステマティックでない。いわゆるグランドセオリーは、一般行動形態学でもなければ行動力学でもないということには注意すべきであろう。

7. 本学会に欠落していること

上述したリサーチが少ないことである。

文献

三隅二不二 リーダーシップ行動の科学 有斐閣 1978